

(資料B)

核物理委員会次期委員候補者の抱負・プロフィールなど

(敬称を略させていただきます。)

●青井 考 (阪大核物理研究センター)

==抱負==

現在の日本の核物理分野は世界をリードする研究施設を数多く持ち、大規模施設のみならず中規模、小規模施設でも、それぞれ特徴のある研究を推進し分野を牽引しています。これまでの日本にない奇跡とも言えるこの状況に、各施設がそれぞれの役割を果たして最大の研究成果をあげ、未来に発展させていけるよう尽力できればと思います。

==プロフィール==

名前： 青井考(あおいのり)
職歴： 1998年 東京大学大学院理学系研究科・助手
2003年 理化学研究所・研究員
2011年 大阪大学核物理研究センター・教授

●岩崎 雅彦 (理研仁科センター)

「抱負」

核物理委員会委員として十分に見える成果につなげ、広く原子核物理分野の発展に寄与したいと思えます。現在、核物理委員会委員としては1期目で、地道な努力としては「核物理プログラム委員会」や「核物理関連国際会議カレンダー立ち上げ」などを担当しています。

原子核物理に関与するものとして、日本で新たに稼働を開始したJ-PARCとRIBFが十全な活躍が上げられるように行動することが重要であり、それなくして日本の核物理の次の発展は無いと考えています。なかでも、J-PARCにおける遅い取り出しが必要な原子核物理・ハドロン物理は、実験成果を上げるための十分な実験環境を早急に整備することが必須であり、この分野で研究をさせて頂いている恩返しとして特に取り組みたいことでもあります。

「学会関連活動」

—委員会委員—

核物理委員会委員

核物理プログラム委員会／実験核物理領域副代表

ハドロンホールユーザー会幹事

日本中間子科学会運営委員会委員

J-PARC MLF施設利用委員会委員

J-PARC MLF実験課題審査会委員

理化学研究所主任研究員および所属長会議議長

—会員—

日本物理学会会員

核談・核理懇会員

日本中間子科学会会員

ハドロンホールユーザー会会員等

「略歴」

1987.3.31 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻 博士課程修了

1987.4.1 東京大学理学部附属 中間子科学研究施設 助手

1989.4.1 東京大学理学部附属 中間子科学研究センター 助手

1997.1.1 東京工業大学大学院 理工学研究科 基礎物理学専攻 助教授

(資料B)

2002.4.1 理化学研究所 中央研究所 主任研究員

2006.4.1-現在 理化学研究所 仁科加速器研究センター 主任研究員

2002.4.1-現在 東京工業大学大学院 理工学研究科 基礎物理学専攻 連携教授

●上坂 友洋 (理研仁科センター)

選出されましたら、原子核物理学発展のために微力を尽くします。

特に問題意識を持っているのは、J-PARC・RIBF・RCNP等の大型研究所と大学との関係です。

大学独法化後の変化や研究所のあり方の変化の中で、研究所と大学の研究者がよりコヒーレントに良い研究を進められる仕組みが原子核物理学の発展に必要だと感じています。これまで、埼玉大学、東大CNS、理化学研究所と全く違う環境で研究を行ってきた経験、RCNPの研計委やRIBF-UECを務めて来た経験を活かしてこの問題に取り組みたいと考えています。

●小沢 恭一郎 (高エネルギー加速器研究機構)

略歴：

京都大学大学院生として、KEK-PS E325実験で原子核中のベクター中間子質量変化の測定で博士号

東京大学CNS助手として、BNL 高エネルギー重イオン衝突実験 (PHENIX実験) に従事

東京大学講師として、BNL PHENIX実験、J-PARC E16実験、E26実験に従事

H23年4月より現職 (KEK准教授)

抱負：

原子核物理学は、原子核や核子の相互作用に対する理解を基本として、不安定核、中性子過剰核、ストレンジ核、ハドロン物理などにその研究分野を広げてきました。その結果、現状の原子核物理は、超冷中性子から高エネルギー重イオン衝突まで多種多様な研究テーマを持つに至っています。そのような多様な研究を支える原子核談話会、核物理委員会にも、多種多様な観点、見識が求められています。

私自身は、これまでの核物理委員の方々に比べると若輩の身ではありますが、広く実験現場を支える若手の見識を示すことで貢献したいと思います。特に、これまで交流して来た低エネルギーから高エネルギーまで様々な研究者との横のつながりを重視します。

核物理研究者が描いた将来計画を単なる物語で終わらせず、今、若手が行動すべき時だと思っています。

●齋藤 直人 KEK素粒子原子核研究所

私は、核子構造を中心とするハドロン物理に関わって来ました。とくに米国ブルックヘブン国立研究所におけるRHIC加速器を偏極陽子コライダーにして、陽子のスピン構造を調べる実験を理研、京大、立教大、ソウル大、東大の方々と協力して進めています。一方で、J-PARCでの実験としてミュオンの異常磁気モーメントと電気双極子モーメントの同時測定実験を提案し、実現に向けて努力しています。核物理の仲間から「原子核物理じゃない！」と責められることも多いのですが、実際には原子物理、核物理、素粒子物理、物性物理、加速器物理など、技術的にも内容的にも多岐に渡る複合プロジェクトです。

既存の枠組みにとらわれず分野を牽引して来られた先達に学び、一歩でも近づくよう自分でも努力して行きたいと思ひますし、また、そのように頑張っている若い仲間を応援したいと思ひ、この度の推薦を受ける事にしました。「核物理の将来」の議論を更に発展させ、既存施設および将来計画の充実に、微力ながら貢献したいと考えています。

●櫻井 博儀 (東京大学理学部)

研究分野 不安定核ビームを利用した核構造・反応研究

選出後の抱負

核物理委員会は研究動向などの情報集約と共有およびこれに基づいた将来戦略を議論する場であると定義し、大学、研究所などの立場・役割・運営形態などを意識しながら日本の核物理研究アクティビティのさらなる発展に貢献する。

(資料B)

●酒見 泰寛 (東北大 CYRIC)

核物理委員会委員の候補に推薦して頂きまして、ありがとうございます。委員に選んでいただけましたら、微力ながら、分野がいつそう盛り上がるよう尽力したいと思います。

核物理分野では、2つの大型計画J-PARC、RIBFが走っており、全国共同利用研究施設RCNP、ELPHでは特徴ある研究が展開されています。世界をリードする研究施設が、一国でこれほど多くあるのは非常に恵まれていると同時に、円滑に成果を出していくためには、コミュニティの限られた資源を有効に活用することも重要と感じています。こういう状況下で、大学附置の小型加速器施設の果たす役割は、研究そして教育という観点からも、ますます重要になってきています。挑戦的なアイデアを試すことができる施設として小型加速器施設は魅力的な存在であるとともに、J-PARC、RIBF等、コミュニティが推進する計画にどのように寄与していくか、今後の大学附置の加速器施設の在り方を核物理委員会で考えていくことは重要と思います。

さらに、核物理は、研究対象・興味が多岐にわたることが、その特徴であり魅力になっています。原子核を対象にした基本対称性・基本相互作用等のFundamental physicsでは、非加速器から大規模加速器実験に至るまで、多彩な研究が進んでいます。これらは超冷中性子、冷却ミュオン、レーザー冷却原子等、冷却粒子をキーワードに、核物理を軸足として素粒子、量子光学等、近隣分野との分野横断的な連携が活発になっています。また、これらの領域は低速・停止不安定核を用いた低エネルギー核構造研究とも深く関連して、核物理の魅力ある一分野を形成しています。コミュニティの推進する大型計画とともに、このような多彩な手法で独自性のある核物理・基礎物理を開拓する芽が着実に育っていくよう、核物理コミュニティに貢献していきたいと考えています。

私自身、EDM、核力の短距離相関、核子スピン構造に関して、東北大・CYRIC、阪大・RCNP、ドイツ・DESYと、小規模から大規模加速器施設にわたって、その特徴を活かした実験を経験してきました。その経験をふまえて、大学の研究室を中心に、個々の規模の加速器施設の有機的連携、人と技術の交流が活発になるよう、できることを考え、分野が一層活力あるものになるよう、努力いたします。

●志垣 賢太 (広島大学大学院理学研究科)

核物理委員候補に突然の推薦をいただき、たいへん光栄です。

私の専門とする高エネルギー原子核衝突物理学分野は、これまでこの種の委員会活動などに比較的消極的であったように感じられます。実験研究の舞台が主として国外であることも一因かと思いますが、原子核物理学の他分野と若干隔絶してきた感も否めません。

実は私は「高エネルギー重イオン物理」という括りをあまり好みません。物理興味は極初期宇宙の物質状態やクォークの閉込現象にあり、重イオン衝突は手法に過ぎないことは自明です。物理を軸に据えれば当然、ハドロン物理は無論、より広範囲の原子核・素粒子・宇宙線物理学分野との連携が志向されます。その一環として2010年には「高温・高密度QCD物質オープンフォーラム」の創設を提唱・主導して、現在までに実験・理論および素粒子などの近隣分野までを含めた百数十名の参加を得ています。日本の核物理の将来に向けた議論も柔軟な立場で掘り起こしていきたいと考えます。

また、J-PARCでの重イオン加速に向けた真剣な議論も始まろうとしています。私は原研在籍時に同加速器の開発建設に携わった個人的な思い入れもあり、施設全体の成功評価を重要な指標として、J-PARCの将来像にも広い視野を持って関与を進めていきたいと思っています。

国外の研究所、国内の研究所、特殊法人(現・独立行政法人)、国立大学に在籍して培った多様な視点を貴重な財産として、選任された場合には尽力を誓います。

(資料B)

●清水 肇 東北大電子光理学研究センター

微力ながら、核物理研究者コミュニティのために働きます。

●下浦 享 (東大 CNS)

微力ながら核物理コミュニティのために貢献できればと思います。

主なプロフィール：

2000年から現職、2005-2009 日本物理学会理事、2009年日米合同ハワイ学会(HAWAII2009)組織委員

Web: <http://www.cns.s.u-tokyo.ac.jp/~shimoura/>

●下田 正 (阪大 (院) 理)

【抱負】

歴代の核物理委員の方々は、全国の様々な分野でリーダーとして活躍しておられ、常に困難な状況の中で大変尽力されてこられました。

その委員会に私に加わることはやや躊躇を覚えますが、もし選出されたならば、長年教務を担当してきた立場から、プロジェクト全体を見渡し、リーダーシップを発揮出来るような能動的な人材育成の場として、実験核物理の分野が最適であるとの認識に基づいて、教育の視点での貢献が出来るのではないかと思います。

【プロフィール】

スピンをキーワードに、核構造・核反応の研究を行ってきました。最近、安定領域から遠く離れた核の構造や高スピン状態を探る実験を、国内外の不安定核ビーム施設において行っています。不安定核物理分野での日本のリードをさらに堅固なものにすべく努力しています。

大学では、学部低学年・学部専門・大学院の各教育改革プログラムを推進してきました。大学外では、物理教育学会近畿支部長、高校物理教科書編集委員をつとめ、高校教育ともかかわっています。

●田中 万博 (KEK素粒子原子核研究所)

氏名：田中万博 (たなか かずひろ)

略歴

S30.06 兵庫県神戸市に生まれる。今現在で56歳。

S49.03 兵庫県立長田高校卒業。

S53.03 大阪大学理学部物理学科卒業。

S58.03 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻博士後期課程単位取得退学。

S58.09 理学博士の学位取得、学位論文題名「重イオン核子移行反応生成核 ^{12}B の核スピン偏極」RCNPのAVFサイクロトロンからの重イオンビームを用いて行った実験の成果である。

S58.04 東京大学理学部物理学教室・教務技官 (山崎敏光教授研究室) に任官。KEK-12GeV-PSを用いたハイパー核実験などに従事した。

S59.06 文部省高エネルギー物理学研究所・物理研究部・助手 (ビームチャンネルグループ) に昇任。いろいろとビームチャンネルを作りながらハイパー核研究や標的核多重破碎反応の研究に従事した。またKEK-PSの新 (北) カウンターホールの設計、建設を行った。

H08.07 文部省高エネルギー物理学研究所・物理研究部・助教授 (ビームチャンネルグループ) に昇任。まずK2K実験のためのニュートリノビームラインの設計、建設、運転を行った。その後、J-PARCハドロン実験ホール建設チームの責任者として、東海での建設に従事した。

H15.12 高エネルギー加速器研究機構・大強度陽子加速器計画推進部・教授に昇任。ハドロンビームライングループ責任者として、J-PARCハドロン実験ホールの設計、建設、運転、改良に従事した。

H21.04 高エネルギー加速器研究機構・素粒子原子核研究所・教授に配置換え。

現在に至る。

(資料B)

受賞など

平成14年3月 日本物理学会第7回論文賞

論文表題：Direct Observation of Sequential Weak Decay of a Double Hypernucleus

掲載誌：Progress of Theoretical Physics, Vol.85, No.6, 1287 (1991)

平成18年4月 第2回（平成17年度）日本原子力学会北関東支部 技術功労賞

件名：陽子加速器ならびに関連するビームラインの運転保守管理と性能向上

抱負

核物理委員候補に推薦していただき、ありがとうございます。選んでいただけた場合は、微力をかえりみず、日本の核物理の発展にむけて、全力で取り組む所存です。

原子核物理学は、多様性の学問です。「原子核」というユニークな多体系を理解するために、どんなモデルがあり得るのか？どんなアプローチがあり得るのか？を研究者個人それぞれの発想と経験を基盤として追求していくことが出来ます。例えば研究に使う加速器をとってみても、電（光）子、陽子、中間子、重イオン、と多様性に富んでいます。さらに加速器を用いない研究からも様々な新しい知見が得られています。私はこの、原子核研究における自由な発想と多様なアプローチ、を大切にしたいと思っています。私自身は、原子核物理学の実験的な研究を志してすでに30年以上がたち、私自身も色々な場所、形、立場で原子核研究を楽しんで来ました。しかしこれからは、次世代を担う若い人たちが、その自由な発想と多様なアプローチを試すことのできる「最新の土俵」あるいは「世界最高の舞台」を準備して行ければと思っています。J-PARCは私自身がその建設に携わった新しい「舞台」です。これをもっとしっかりした形にまとめ上げたい。さらにRIBF、RCNPのリングサイクロトロン、LEPS、東北大のELPH・・・などなど、我が国には世界に誇りうる原子核研究の「舞台」があります。これら全体のバランスの取れた発展を心がけ、常に世界のトップに立ち続けることのできる立派な「舞台」を若い人たちのために準備して行きたいと思っています。

最後に、この場をかりて、皆様をお願いします。私が所属する「高エネルギー加速器研究機構・素粒子原子核研究所（素核研）」ですが、これは高エネルギーと原子核両分野の共同利用研です。しかしもともとが「高エネルギー研」であった伝統のせい、今日に至るも原子核研究はこの素核研の中で主流になり切れていないと感じています。素核研の中で原子核研究のvisibility（視認性）をあげていかななくてはなりません。おそらくはそのことが高エネルギー分野にとっても「得」になるとと思っています。しかしそのためには、内部にいる原子核研究者の力だけでは、残念ながら力不足です。どうかコミュニティ全体として、今後とも強力なバックアップをお願いしたいと思います。

●田村 裕和（東北大（院）理）

核物理委員長を2年間務めました。委員長の責務を十分果たせていない面もあったと思います。この場をかりてお詫びします。

先輩方の多大な努力により、われわれ日本の核物理コミュニティはRIBFとJ-PARCという世界最高の施設を手に入れ、過去にない発展・成熟期を迎えようとしています。しかしこの環境を享受するのみではなく、日本の核物理を今後さらに発展させるため、今後数十年先を見据えた核物理研究の新たな将来像の議論をはじめの時期が来ていると思います。そんな動機から「日本の核物理の将来」レポートを若手のみなさんに作っていただくこととしました。活発に対応して下さったおかげで、もうすぐ最終版ができようとしています。この活動を通して、若手が自らの分野の将来を考えるとともに、核物理内の他グループとも交流するきっかけができたのではないかと思います。

私は10月から学術会議の連携委員に就任しましたが、来年度後半からは、学術会議で大型計画のマスタープランの見直しが議論されることに決まりました。昨年度、核物理委員会は議論のうへ核物理コミュニティの大型計画として、J-PARC高度化（ハドロン施設）とRIBF高度化を提案し、大型研究計画としてRCNPの計画、電子光・LEPSの計画、反陽子の計画を提案しました。これらのさらなる検討と、これら以外の計画も含めた、ある程度優先度を意識した議論を進めなければならないと思っています。「日本の核物理の将来」レポートはそうした議論のためのスタート地点となります。核物理委員に再任されましたなら

(資料B)

ば、核物理委員会の下に、若手を多く入れた常設の「将来計画小委員会」を設置し、グループ横断型の勉強会やタウンミーティングなどを通して、コミュニティ全体で将来計画の検討を深めたいと思っています。

また、核談ホームページの改定や市民向け企画の開催などによって、一般市民や高校生、学部学生へ向けたコミュニティとしての情報発信も行っていけたらと思っています。

一方で、KEKとの関係、共同利用拠点 (RCNP・ELPH) や関連施設の支援、核理論との連携、高エネルギーなどの周辺分野やアジア等の国外コミュニティとの協力などもますます重要な問題となっています。力不足のため思うように進まないことが多いのですが、皆さまとともに努力したいと思います。

東北大理 田村裕和

ホームページ <http://lambda.phys.tohoku.ac.jp/~tamura/>

●永江 知文 (京都大理)

永江 知文 (京都大学大学院理学研究科・教授)

プロフィール:

1986 東大大学院修了

1986-1997 旧東大原子核研究所 助手→助教授

1997-2002 KEK 素核研 助教授

2002-2007 KEK 大強度陽子加速器計画推進部 助教授→教授

2007 - 京大理 教授 (現職)

専門は、ストレンジネス原子核物理。現在、J-PARCにおけるグザイ・ハイパー核やK中間子原子核の探索実験の実験責任者。

抱負:

大学の法人化後、大学と研究所との立場が大きく変化しました。私は、共同利用研と大学の双方に籍をおいた経験を持つものとして、法人化後の大学 (ユーザー) と研究機関との新たな関係の構築に貢献したいと考えています。原子核コミュニティでは、KEK, 理研, RCNP, ELPHなど複数の研究機関が対象となりますが、それぞれが微妙に異なったユーザーへの立ち位置をもちながら運営されています。原子核物理学研究の健全な発展のためには、法人化以前に増して、コミュニティ主導の研究推進体制が重要となってきたと思います。大学のユーザーを代表して、これに取り組む所存です。

また、これまでも進みつつある国際化に関して、日本の核物理コミュニティから、アジアや世界の原子核コミュニティへの情報発信ができるよう努めたいと考えます。もちろん、一般向け、若い世代に向けたコミュニケーションにも貢献したいと思います。

最後になりますが、研究者の一人としては、J-PARCにおいて一日も早く良い研究成果を出すことを責務とし、全力を傾けています。これをもとに、J-PARCが次世代の人々の研究場所としてますます発展していくものと確信しています。

●仲澤 和馬 (岐阜大学)

ご推薦いただきありがとうございます。

しかしまことに申し訳ありませんが、固くご辞退申し上げます。

●中野 貴志 (阪大核物理研究センター)

推薦していただきましたので、核物理委員に選出された場合に、どのような考えで活動していこうと思っているか説明します。

私は、平成16年以降、6年間に渡って核物理委員を務めて来ましたが、その間に国立大学の法人化という大きな制度上の変化がありました。また、ほぼ時を同じくして、RIBFとJ-PARCという2つの巨大実験施設が稼働し始め、関連の深い施設としてSuper KEKBの建設も始まりました。

(資料B)

どのようにして大学や分野の枠を超えた協力体制を築き、世界的に注目の集まっているこれらのプロジェクトで大きな成果を挙げ、次につなげるかということが我々の課題です。国立大学法人化以降、私が所属する全国共同利用・共同研究拠点と同様、コミュニティを結びつける横糸としての核物理委員会の重要性は高まっています。委員に選出された場合は、核物理委員会の、情報を迅速に伝える力、意見を吸い上げる力、意見をまとめ具体化する力を高めるために微力を尽くしたいと思います。

●中村 哲 (東北大学院理学研究科)

「核物理委員会次期委員候補者としての抱負」 中村 哲 (Satoshi N. Nakamura)

これまで主に海外において研究を進めてきておりますが、KEK-PS で育ち、鍛えられた者として国内の研究機関が日本の核物理に果たす役割の重要性は研究、教育の両面から理解しているつもりです。

今回、「日本の核物理の将来を考えるWG」に参加させて頂いたことにより日本の核物理の未来と過去について考える機会を得ました。そこで、現在、日本がJ-PARC, RIBF という世界最高の加速器を擁し、研究を推進できる環境にあることはこれまでの諸先生、先輩方の努力の賜物であることを改めて認識しました。逆に言えば、日本の核物理の将来は現在の我々の活躍にかかっているわけで、今回、核物理委員会の次期委員に選んで頂いた場合は、若輩ではありますが、将来の原子核研究者が希望を持って研究を進められるような環境を整えるお手伝いができたら、と考えております。

プロフィール

1989年 東京大学理学部物理学学科卒業、
1995年 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了 博士 (理学)
1995年～2000年 理化学研究所ミュオン科学研究室研究員
(1996年-1998年 理研 RAL 支所 (英国 Rutherford Appleton Lab.)に常駐)
2000年～現在 東北大学大学院理学研究科助教授、准教授
2008～ J-PARC 50GeV PS PAC メンバー
2005～ 東北大学原子核理学研究施設/電子光理学研究センター課題採択委員

研究テーマ

TRIUMF における π 中間子のヘリウム中における準安定状態実験、
KEK PS/CERN LEAR における反陽子のヘリウム中における準安定状態の研究、
KEK PS におけるK中間子水素原子の X 線精密測定による Kbar N 相互作用の研究、
RIKEN-RAL におけるミュオン触媒核融合実験、ミュオン寿命測定実験、
米国ジェファーソン研究所におけるラムダハイパー核電磁生成分光実験、
東北大ELPH, ドイツマインツ大学 MAMI-C を用いた電子線を用いたストレンジネス研究

●中村 隆司 (東工大)

核物理委員に選出された場合の抱負 2012.1.11 中村隆司 東京工業大学理工学研究科教授
核物理コミュニティにとって最も重要なことは本分野の将来計画だと思います。将来を考える上で重要なことは、特に若い世代がどのような核物理の未来を描いており、それを実行していくのか、ということに尽きます。約1年半前に核物理委員会主導で「日本の核物理の将来レポート」ワーキンググループを立ち上げることになり、私はその世話人代表を仰せつかりました。私の不手際もあり作業は遅れ気味ではありますが、参加した 100 名を超える若手研究者の皆さんの尽力、さらには諸先輩方・主要研究所の支援もありまして、2012 年度早期には完成する見込みとなりました。若手の皆さんに核物理の将来について真剣に考え議論してもらう機会をもつ、という主要目的の一つは十分達成されたのではないかと思います。次期の核物理委員会では、この成果をどのように昇華するのが最重要課題となると思います。具体的な次期計画や目標の設定、それに対するロードマップ作り、さらにはそのプライオリティ付けなど、困難な作業にあたる必要があります。核物理委員に選出されましたら、核物理コミュニティを代表し、日本の核物理の将来計画策定に向けて、尽力する所存であります。

(資料B)

私が研究上関わりの深い不安定核物理分野につきましては、理研 RIBF を、特に近未来、どのように盛り立てていくのが重要です。RIBF では電力事情のために運転が 5-8 か月に 限られている実情があり、問題となっています。また、アップグレードも計画されていますが、予算獲得はこれからであり、核物理コミュニティとしてサポートする必要があると思います。一方、RCNP の将来計画も次期核物理委員会で議論すべきだと思います。これについては、上述の将来WGでも議論され、また、RCNP の研計委や運営委員会でも議論されつつあります。核物理委員会では、今後の道筋について、関係者と調整しつつ核物理コミュニティとしての方向性を決めていく必要があると思います。

最後に、大学の一教員として、大学で起こっている諸問題についても核物理委員会で議論 することが必要だと感じています。予算・人員の効率化が大学では常に求められており、手をこまねいておりますと、じり貧の状況に陥りかねません。大学によって有為な人材が 育つわけですから、核物理コミュニティとして大学をどう盛り立てていくのかは委員会が 議論すべき最重要課題の一つだと思います。

略歴

1996 年 学位取得(博士・理学)(東京大学理学研究科物理学専攻)

1995-2000 年 東京大学理学研究科助手(1998-2000 年 ミシガン州立大学客員研究員)

2000-2008 年 東京工業大学理工学研究科基礎物理学専攻助教授

2008 年-現在 同教授

主要な研究テーマ 不安定核ビームを用いたエキゾチック核の構造・反応の研究

●野呂 哲夫 (九大)

特に表明すべき抱負がある訳ではありませんが、推薦者が書かれた推薦の理由にあるように、地方大学の視点や小規模加速器を運用・利用している核物理研究者の視点での意見を出すことはできるかと思います。

●宮武 宇也 (KEK)

プロフィール：

不安定原子核を使って、核構造・反応機構の研究、天体における元素合成過程の実験室測定、新素材開発研究などを行って来た。短寿命核分離加速実験装置の開拓、それによる研究領域の拡大にたずさわって来た。

抱負：

RIBFの開始に伴い、短寿命核科学の分野は未知原子核を含む広大な原子核を調べ、使える時代に入った。量子多体系の原子核物理においては、新たな現象の探索、より深い理解が可能となり、原子核の束縛限界（超重核）や核動力学の定量的理解を展望できるようになった。前世紀からの課題であった元素の起源解明に貢献することも夢ではなくなりつつある。

この可能性をさらに広げて行くには、アイソスピンを変化させた高強度短寿命核ビームが必要になる。数百kWクラスの短寿命核ビーム施設が建設されつつある現時点で、その先を展望して行くには、研究目的の先鋭化とともに他分野との融合、裾野の拡大等に誠意を持って望まなければならない。核物理の一つの柱を担って来た短寿命核科学において、上記の観点で私なりの努力をしたい。